『語学教育研究論叢』第 41 号

『訓蒙図彙』元禄版本の「今云」注記の改訂

張　艶軍

The Revision of “Nowdays We Say” Related Content in the Genroku Edition of *Kinmōzui*

ZHANG Yanjun

摘要

《訓蒙図彙》是由朱子学者中村惕斎于宽文六年撰写的启蒙类图解辞典，全二十卷。现在可以确认的版本有五个，根据内容可以将这五个版本分为三个系统。“今云”这种读音的标注方式，在初版本系统中有 31 例（含词汇 31 个）。元禄版本、宽政版本与初版本系统的版面、内容相比，发生了很大的变化，这两个版本中的大部分项目引用了初版本系统中“今云”所指的词汇，却舍弃了“今云”这种标注方式。

元禄版本和宽政版本为什么要删除“今云”这种读音的标注方式。本文将以“蓼”“蕪菁”“土肉”为研究对象，来探讨它们在五个版本中的项目构成，并试图阐明以下内容。初版本非常重视汉语、和训、下位分类等内容，而元禄版本将很多读音和分类都删除了，仅留下了口语词汇、俗语词汇。另外，元禄版本还增加了很多本草学中有关药效的内容。本文对这些内容进行了考证，并弄清楚了元禄版本之后的《訓蒙図彙》中出现的本草书式的性格特点。

キーワード：中村惕斎　訓蒙図彙　寛文六年初版本　元禄版本　今云

はじめに

寛文六年（1666）初版、中村惕斎撰『訓蒙図彙』二十巻は、日本最初の絵入り百科事典である。木村陽二郎氏[(1)]、小林祥次郎氏[(2)]、石上阿希氏[(3)]、楊世瑾氏[(4)]の調査に拠れば、現存する『訓蒙図彙』版本は、次の五種が確認されている。

❶初版本：寛文六年（1666）刊初版・中村惕斎撰『訓蒙図彙』20 巻 14 冊（国立国会図書館蔵）。

❷頭書本：寛文八年（1668）刊『訓蒙図彙』20 巻、20 巻 5 冊（武庫川女子大学附属図書館蔵、相田満氏架蔵）。

❸無刊記本：寛文九年（1669）～元禄五年（1692）刊『増補／訓蒙図彙』20 巻 8 冊（お茶の水女子大学図書館蔵）。

❹元禄版本：元禄八年（1695）刊撰者未詳『頭書増補／訓蒙図彙』21 巻 10 冊（国立国会図書館蔵）。

❺寛政版本：寛政元年（1789）刊撰者未詳『頭書増補／訓蒙図彙大成』21 巻 10 冊（国立国会図書館蔵）。

初版本から大きく内容を改訂しない❶❷❸について、石上氏は、❶❷は「図、語ともに内容に異同はない」とし、❸については「本文は寛文六年版と同じで、図もほぼ同じであるが細かい箇所が省略されているなどの違いはある」とされた[(5)]。

本稿では、❶❷❸を「初版本系統」と呼ぶこととする。なお、本稿の使用テキストは、上の版本に拠った。

「今云」注記は、「初版本系統」の三種の版本にのみ 31 例が確認される。しかし、版を一新した❹元禄版本・❺寛政版本には「今云」注記はほとんどの項目に見られない。❺寛政版本は、❹元禄版本の内容をほぼそのまま継承する。したがって、「今云」注記は、ほぼ、❹元禄版本によって意図的に削除された可能性が想定される。

❹元禄版本は、なぜ、「今云」注記を削除したのか。

本稿は、「初版本系統」で「今云」注記をもつ三項目「蓼（たで）」「蕪菁（あをな・な）」「土肉（こ・なまこ）」を取りあげ、五種の版本の項目構成を検討する。

これによって、❹元禄版本が、❶初版本が重視した漢語・和訓・下位分類等の多くを削除し、口語語彙・俗語語彙のみを残したこと、その代わりに、本草学の薬効の記事を増補したことを考証する。中村惕斎の手を離れた❹元禄版本以降の『訓蒙図彙』が、後人の手によって本草学的な性格を付加されていったことをあきらかにする。

1. 「今云」注記の 31 例

初版本の「今云」注記は 31 例ある。その分布は、次の通りである。

巻二・地理類	2 ／ 60 例「市」「閭」
巻六・衣服類	2 ／ 52 例「帶」「幔」
巻七・寶貨類	2 ／ 52 例「礬」「革」
巻八・器用一類	3 ／ 100 例「畫」「簿」「香盒」
巻九・器用二類	1 ／ 82 例「櫝」
巻十一・器用四類	4 ／ 142 例「鍋」「釜」「竈」「署扁」

巻十二・畜獣類　　1 ／ 64 例「野豬」
巻十三・禽鳥類　　1 ／ 76 例「鴟」
巻十四・竜魚類　　2 ／ 64 例「鱣」「土肉」
巻十五・虫介類　　1 ／ 108 例「蚶」
巻十六・米穀類　　1 ／ 36 例「豌」
巻十七・菜蔬類　　2 ／ 56 例「蕪菁」「菠薐」
巻十八・果蓏類　　3 ／ 52 例「杏」「橘」「來禽」
巻十九・樹竹類　　2 ／ 84 例「竹」「衛矛」
巻二十・花草類　　4 ／ 128 例「蘭」「蓼」「菖」「蒴藋」

❶初版本の「今云」注記 31 例を、❹元禄版本がどのように継承しているのかを検証することによって、❹元禄版本の削除の意図があきらかになるであろう。上記 31 例は、「今云」注記の脱落の原因によって、次の七種類に分類される。

（1）下位分類を省略したために、「今云」が脱落した七例。
「市」「帶」「幔」「菖」「橘」「蘭」「蓼」。

（2）和語は残すが、「今云」が脱落した十五例。
「革」「蒴藋」「畫」「香盒」「釜」「竈」「野豬」「鴟」「鱣」「蚶」「豌」「蕪菁」「菠薐」「杏」「鍋」。

（3）注記を省略したために、「今云」が脱落した二例。
「土肉」「來禽」。

（4）和語を省略したために、「今云」が脱落した一例。
「槠」

（5）和語を振り仮名としたために、「今云」が脱落した一例。
「竹」

（6）「今云」を「今いふ」に改めた四例。
「閭」「簿」「署扁」「衛矛」。

（7）「今云」を「和名」に改めた一例。
「礬」

上記のうち、（6）（7）は、実質的に「今云」注記が生きていると解される。特に、（7）「今云」を「和名」に改めた「礬」は、興味深い。このことは、❹元禄版本が「今云」注記を和名と解していたことを意味すると考えられる。

紙幅の都合上、上記 31 例の中から（1）「蓼」、（2）「蕪菁」、（3）「土肉」をとりあげ、❹元禄版本が、❶初版本の「今云」注記をどのように改訂したのかを検証する。

2.　下位分類の省略による「今云」の脱落

表 1 は、『訓蒙図彙』五種の版本の項目「蓼」の本文を対照して示したものである。

表１・『訓蒙図彙』「蓼」

		❶初版本	❷頭書本	❸無刊記本	❹元禄版本	❺寛政版本
ふりがな	呉音	れう	れう	れう	れう	れう
見出し語	漢語	蓼	蓼	蓼	蓼	蓼
異名	和語	たで	たで	たで	たで	たで
下位分類①	漢語	○青(せいれう)–蓼	○青(せいれう)–蓼	○青(せいれう)蓼		
	和語	あをたで	あをたで	あをたで		
下位分類②	漢語	紫(しれう)–蓼	紫(しれう)蓼	紫(しれう)蓼		
	和語	あかたで	あかたで	あかたで		
下位分類③	漢語	水(すいれう)–蓼	水(すいれう)–蓼	水(すいれう)蓼		
「今云」	和語	**今云**いぬたで	**今云**いぬたで	**今云**いぬたで		
注記		葉–上二有ル二	葉–上二有ル二	葉–上二有ル二		
		黒–點_者–也	黒點_者也	黒點_者也		
薬効					○蓼(たで)はくはくらんをやめ水気おもてうきばれたるを治(ち)し目(め)を明(あきらか)にす	○蓼(たで)はくはくらんをやめ水氣面(すいきおもて)うきばれたるを治(ち)し目(め)を明(あきらか)にす

表１から次のことが確認される。

第一に、❶初版本の本文は、見出し語・異名・下位分類①②③・「今云いぬたで」・注記から成る。初版本において、見出し語「蓼」についての記述は、「異名」のみである。それ以外の紙幅は、全部下位分類を記す。

❷頭書本・❸無刊記本の本文は、初版本と同じである。❹元禄版本・❺寛政版本は、見出し語・異名・薬効から成る。

第二に、❶初版本の下位分類①②③・注記を、❹元禄版本とそれを襲う❺寛政版本は削除している。

「水(すいれう)－蓼」は「蓼」の下位分類③である。❶初版本は、「今云」として「水(すいれう)－蓼」の和語「いぬたで」を記載する。一方、❹元禄版本は「今云いぬたで」を含む、すべての下位分類を削除し、薬効を加える。

つまり、❹元禄版本は和語「たで」のみを異名として掲出し、それ以外は削除して、薬効を記載している。見出し語の下位分類よりも、薬効を重視している。

3. 「今云」の意図的な削除＝精確な発音重視から一般的な発音の重視へ

表２は、『訓蒙図彙』五種の版本の項目「蕪菁」の本文を対照して示したものである。表中の○は原文にあるが、□は文字や記号の脱落箇所である。以下も同じ。

表２・『訓蒙図彙』「蕪菁」

		❶初版本	❷頭書本	❸無刊記本	❹元禄版本	❺寛政版本
ふりがな	漢音	ぶせい	ぶせい	ぶせい	ぶせい	ぶせい
見出し語	漢語	蕪菁	蕪菁	蕪菁	蕪菁	蕪菁
異名①	和語	あをな	あをな	あをな		
「今云」	和語	**今云**な	**今云**な	**今云**な	な	な
異名②	漢語	蔓(まん)–菁(せい)同	蔓(まん)–菁(せい)同	蔓(まんせい)菁同		
下位分類①	漢語	○蕪(ぶ)–根(こん)	○蕪(ぶ)–根(こん)	□蕪根		
	和語	かぶら	かぶら	かぶら		
下位分類②	漢語	菘(すうさい)–菜	菘(せうさい)–菜	菘(すうさい)菜		
	和語	たかな	たかな	たかな		
「今按」		今按葉–高ク根小ナル者也	今按葉高ク根小ナル者也	今按葉–高ク根小ナル者也		
薬効					○蕪菁(あをな)は食を消(せう)し気をくたし嗽(せき)をやむつねにくらへは中をつうし人をこへすこやかならしむ	○蕪菁(あをな)は食(しよく)を消(せう)し氣(き)をくだし嗽(せき)をやむつねにくらへば中(うち)を通(つう)じ人をこへすこやかならしむ

表２から次のことが確認される。

第一に、❶初版本の本文は、見出し語・異名①②・「今云な」・下位分類①②・「今按」から成る。❶初版本において、見出し語「蕪菁」についての記述は、異名①②・「今云な」であり、それ以外はすべて下位分類を記す。

❷頭書本・❸無刊記本の本文は、初版本と同じである。❹元禄版本・❺寛政版本は、見出し語・「な」・薬効から成る。

第二に、❶初版本の異名①②・下位分類①②・「今按」を、❹元禄版本とそれを襲う❺寛政版本は削除している。また、❶初版本で「今云な」とある所が、❹元禄版本

では「な」のみであり、薬効の記述を加える。

つまり、❶初版本が、複数の異名と下位分類を取り上げているのに対して、❹元禄版本は、和語「な」のみを取り上げ、見出し語の異名や下位分類よりも薬効を重んじている。

4.　解釈の削除に伴う「今云」の消失。

表３は、『訓蒙図彙』五種の版本の項目「土肉」の本文を対照して示したものである。

表３・『訓蒙図彙』「土肉」

	❶初版本	❷頭書本	❸無刊記本	❹元禄版本	❺寛政版本
ふりがな　漢音+呉音 見出し語　漢語 異名①　和語 「俗云」　和語	とにく 土肉 こ 俗云なまこ	とにく 土肉 こ 俗云なまこ	とにく 土肉 こ 俗云なまこ	とにく 土肉 なまこ	とにく 土肉 なまこ
薬効				○土肉(なまこ)は元気(げんき)をおぎなひ五臓(ざう)をまし三焦(さんせう)の熱(ねつ)をさる鴨(かも)と同しく食(しよくす)へからず 海鼠(こ)同	○土肉(なまこ)は元氣(げんき)をおぎなひ五臓(ざう)をまし三焦(さんせう)の熱(ねつ)をさる鴨(かも)と同じく食(しよく)すべからず
注記	對(シテ)二乾ル一者ニ一称レ之ヲ也今按土一肉未レ詳所レ圖古云海一鼠(かいそ) **今云**海一參(かいじん)也又曰沙噀(さそん)曰泥(でい)盖皆此一物也	對(シテ)二乾ル一者ニ一称レ之ヲ也今按土一肉未レ詳所レ圖ル古云海一鼠(かいそ) **今云**海一參(かいじん)也又曰沙噀(さそん)曰泥(でい)盖皆此一物也	對(シテ)二乾ル者ニ一称レ之ヲ也今按土一肉未レ詳所レ圖古云海鼠(カイソ) **今云**海一參(かいじん)也又曰沙噀(さそん)曰泥(でい)盖皆此一物也		

表３から次のことが確認される。

第一に、❶初版本･❷頭書本･❸無刊記本の本文は、見出し語･異名①･「俗云なまこ」･注記から成る。❹元禄版本・❺寛政版本は、見出し語・「なまこ」・薬効から成る。

第二に、❶初版本の異名①「こ」を、❹元禄版本とそれを襲う❺寛政版本は削除している。「俗云」注記として❶初版本は「なまこ」とするが、❹元禄版本は「俗云」はない。しかし、「なまこ」という語は掲出される。このことから、❹元禄版本は、文字数を削減するために、「俗云」「今云」の注記を削除したのではないかと考えられる。

❶初版本は、見出し語「土肉」と図「海鼠」について注記を施す。「今云」で「海（かいそ）－鼠」の漢語「海（かいじん）－參」を注記している。

一方、❹元禄版本は、「今云海－參（かいじん）」を含む、すべての注記を削除し、薬効を加える。

つまり、❶初版本は名称や見出し語・図の注記を詳細に記載するが、❹元禄版本は和語「なまこ」を唯一の異名として掲げ、図には「海鼠（こ）同」と記すのみで、薬効を優先する。語彙に関する記載よりも、薬効を重視している。

5. 『訓蒙図彙』元禄版本と『本草綱目』『庖厨備用倭名本草』

『訓蒙図彙』初版本系統に対して、❹元禄版本が施した改訂は、薬効に関する記述であった。

❹元禄版本のその薬効の記述は、どのような文献を参照したのか。

木村陽二郎氏は、

> 本文を草するにあたっては、おそらく動植物では『本草綱目』や、向井元升の『庖厨（ほうとう）備用大和本草』（一六八四）などを参考にしたのではなかろうか。

と述べられた[(6)]。木村氏が推測されたように、❹元禄版本の薬効の記載は、『本草綱目』『庖厨備用倭名本草』を参照しているのであろうか。この三書を比較検証する必要がある。

『本草綱目』は、明・李時珍（1518-1593）の撰になる本草書である。慶長 12 年（1607）に日本に伝来し、和刻本が版行された。白井光太郎氏によれば、日本における『本草綱目』の和刻本は五種ある[(7)]。渡辺幸三氏は、明治以前の『本草綱目』の版本について、三系統十三種を確認されている[(8)]。岡西為人氏[(9)]、郭崇氏[(10)]は、日本で刊行された『本草綱目』の版本として、三系統十四種を確認されている。楊世瑾氏は、『訓蒙図彙』寛文版本刊行の前後に、四種の『本草綱目』和刻本が刊行されていると指摘された[(11)]。本稿は日本初の和刻本、寛永十四年（1637）版に拠る。

表４～６は、『訓蒙図彙』元禄版本の「蓼」「蕪菁」「土肉」と、『本草綱目』寛永十四年版・『庖厨備用大和本草』の本文を対照して示したものである。『訓蒙図彙』元禄版本の薬効と『本草綱目』『庖厨備用大和本草』とが重なる内容は太字で示した。なお、『本草綱目』にある「主治」とは、杉本つとむ氏によれば、「効能・薬効を示す」の意である[(12)]。

表４・『訓蒙図彙』「蓼」と『本草綱目』『庖厨備用倭名本草』

	『訓蒙図彙』元禄版本	『本草綱目』寛永十四年版	『庖厨備用倭名本草』
蓼	蓼(たで) **○蓼(たで)はくはくらんをやめ、水気・おもてうきばれたるを治(ぢ)し、目(め)を明(あきらか)にす。** 蓼(れう)　たで。水蓼(いぬたて)。	蓼（ツルタテ） 實【主治】**明**シレ　**目**ヲ　温レ中ヲ、耐ヘニ　風寒ニ一　、**下**シニ**水**－　**氣**ヲ一　、**面浮**－　**腫**癰－瘍（『本經』）。歸レ　鼻ニ　除キニ　腎氣ヲ一　、去リニ　癧瘍ヲ一、**止**メニ　**霍**－　**亂**ヲ一　、治スニ小兒頭－　瘡ヲ一（甄權）。	蓼（レウ・タテ） （前略）蓼苗葉、味辛性温毒ナシ。舌ニ歸ス。大小腸ノ邪氣ヲ除キ中ヲ利シ。志ヲ益ス。生菜ニシテ食シテヨク腰脚ニ入。（前略）

表４から次のことが確認される。

第一に、『訓蒙図彙』元禄版本の「蓼」の薬効は、次のとおりである。

蓼(たで)はくはくらんをやめ、水気・おもてうきばれたるを治(ぢ)し、目(め)を明(あきらか)にす。

『本草綱目』「蓼」の「實」の「主治」にある「明シレ　目ヲ　（目を明かにし）」「止メニ　霍－亂ヲ一（霍乱を止め）」は、元禄版本の「目(め)を明(あきらか)にす」「くはくらんをやめ」と意味が同じである。

元禄版本の「おもてうきばれたる」は、『本草綱目』の「面浮－　腫」と同意で、顔が腫れるという意味である。『本草綱目』の「下シニ　水－氣ヲ一（水気を下し）」「面浮－　腫」は、元禄版本の「水気・おもてうきばれたるを治(ぢ)し」と意味が近い。

第二に、『庖厨備用倭名本草』の「蓼」にも薬効が記されるが、元禄版本の薬効と重なる内容がない。

元禄版本の「蓼」の薬効は、『本草綱目』の「主治」を参照して、漢文を読み下している可能性がある。

表５・『訓蒙図彙』「蕪菁」と『本草綱目』『庖厨備用倭名本草』

	『訓蒙図彙』元禄版本	『本草綱目』寛永十四年版	『庖厨備用倭名本草』
蕪菁	蕪菁（ぶせい）な **○蕪菁（あをな）は食を消（せう）し、気をくたし、嗽（せき）をやむ。つねにくらへは、中をつうし、人をこへ、すこやかならしむ。**	蕪菁（アヲナ・カフラナ） 根葉【主治】利シ二　五－臓ヲ一、輕レ　身ヲ　益レ　氣ヲ　、可シ二　長ク食フ一レ　之ヲ（『別録』）。 **常ニ一食ヘハ　通レ　中ヲ、令シテ二レ　人ヲ　肥健ナラ一**（蘇頌）。 **消シレ　食ヲ** **下レ　氣ヲ** **治レ　嗽ヲ** 止メ二　消渴ヲ一　、去ル二　心－腹冷－痛、及ヒ　熱毒風腫、乳癰妬乳寒熱ヲ一（孟詵）。	蕪菁（フセイ・カフラナ） （前略）蕪菁、根葉味苦性温、毒ナシ。 五臓ヲ利シ、 身ヲ輕クシ、氣ヲマス。 **常ニ食スレハ中ヲ通シ、人ヲ肥健（ヒケン）ニシ** **食ヲ消シ、** **氣ヲ下シ** **嗽（ソウ）ヲトヽメ、** 消渴・心腹ノ冷痛・熱毒風腫・乳癰妬乳（ニウヨウトニウ）寒熱ヲサル。 （後略）

表５から次のことが確認される。

第一に、『訓蒙図彙』元禄版本の「蕪菁」の薬効は、次のとおりである。

蕪菁（あをな）は食を消（せう）し、気をくたし、嗽（せき）をやむ。つねにくらへは、中をつうし、人をこへ、すこやかならしむ」

『本草綱目』「蕪菁」の「根葉」の「主治」にある「常ニ一食ヘハ　通レ　中ヲ、令シテ二レ人ヲ　肥健ナラ一（常に食へば、中を通じ、人をして肥健ならしむ）」は、元禄版本の「つねにくらへは、中をつうし、人をこへ、すこやかならしむ」と意味が同じである。

また、『本草綱目』の「消シレ　食ヲ下レ氣ヲ（食を消し気を下し）」は、元禄版本の「食を消（せう）し、気をくたし」と同意である。一方、『本草綱目』の「治レ　嗽ヲ（嗽を治し）」は、元禄版本の「嗽（せき）をやむ」と較べて、動詞が違っている。しかし、両者の意味は変わらない。

第二に、『庖厨備用倭名本草』「蕪菁」の「常ニ食スレハ中ヲ通シ、人ヲ肥健（ヒケン）ニシ（常に食すれば中を通じ、人を肥健（ひけん）にし）」は、元禄版本の「つねにくらへは、中をつうし、人をこへ、すこやかならしむ」と意味が同じである。

また、「食ヲ消シ、氣ヲ下シ（食を消し、気を下し）」は、元禄版本の「食を消（せう）し、気をくたし」と同意である。一方、『庖厨備用倭名本草』の「嗽（ソウ）ヲトヽメ（嗽を止（そう）め（とど））」は、元禄版本の「嗽（せき）をやむ」と較べて、動詞と振り仮名が違っている。しかし、両者

の意味は変わらない。

第三に、『庖厨備用倭名本草』と『本草綱目』の間にも同じ内容がみられる。

『庖厨備用倭名本草』の「五臓ヲ利シ、身ヲ輕クシ、氣ヲマス（五臓を利し、身を軽くし、気をます）」は、『本草綱目』の「利シ　五－　臓ヲ、輕レ　身ヲ　益レ　氣ヲ（五臓を利し、身を軽くし、気を益す）」と意味が同じである。

また、『庖厨備用倭名本草』の「消渴・心腹ノ冷痛・熱毒風腫・乳癰妬乳寒熱ヲサル（消渴・心腹の冷痛・熱毒風腫・乳癰妬乳寒熱をさる）」は、『本草綱目』の「止メ消渴ヲ、去ル心－　腹冷－痛及ヒ熱毒風腫・乳癰妬乳寒熱ヲ（消渴を止め、心腹冷痛及び熱毒風腫・乳癰妬乳寒熱を去る）」と意味が同じである。『庖厨備用倭名本草』の「蕪菁」の薬効は、『本草綱目』の「根葉」の「主治」と共通の内容が多い。『庖厨備用倭名本草』は『本草綱目』を参照した可能性が高い。

他方、『訓蒙図彙』元禄版本の「蕪菁」の薬効は、『本草綱目』の「主治」と『庖厨備用倭名本草』と意味が同じである。だから、『訓蒙図彙』元禄版本の「蕪菁」が、直接『本草綱目』を参照したのか、それとも『庖厨備用倭名本草』を参照したのかは、これだけでは判断できない。

表６・『訓蒙図彙』「土肉」と『庖厨備用倭名本草』

『本草綱目』は「土肉」を立項していない。

	『訓蒙図彙』元禄版本	『本草綱目』寛永十四年版	『庖厨備用倭名本草』
土肉	土肉なまこ **○土肉は元気をおぎなひ、五臓をまし、三焦の熱をさる。** 鴨と同しく食へからず。		海参（ジン・イリコ） （前略）海参、味甘鹹、性平、毒ナシ。 **元氣ヲ補ヒ** **五臓六腑ヲ滋－益シ、三焦ノ人－熱ヲサル。** 鴨肉ト烹煮シテ食スレバ、勞怯虚損諸疾ニヨシ。猪肉ト煮テ食スレハ肺虚欬嗽ヲ治ス。（後略）

表６から次のことが確認される。

第一に、『訓蒙図彙』元禄版本の「土肉」の薬効は、次のとおりである。

土肉は元気をおぎなひ、五臓をまし、三焦の熱をさる。鴨と同しく食へからず」

第二に、『庖厨備用倭名本草』の「土肉」の「元氣ヲ補ヒ（元気を補い））」は、元禄版本の「元気をおぎなひ」と同じである。『庖厨備用倭名本草』の「五臓六腑ヲ滋–益シ、三焦ノ人–熱ヲサル（五臓六腑を滋益し、三焦の人熱をさる）」は、元禄版本の「五臓をまし、三焦の熱をさる」と比べると、元禄版本のほうが字数を減らしているが、意味はほぼ同じである。

一方、『庖厨備用倭名本草』には「鴨肉ト烹煮シテ食スレバ、勞怯虚損諸疾ニヨシ（鴨肉と烹煮して食すれば、勞怯虚損諸疾によし）」とあり、海参と鴨肉と一緒に食べると、労怯虚損諸疾という病気によいと書いている。ところが、元禄版本は、「鴨と同しく食へからず」と記している。

『訓蒙図彙』元禄版本の「土肉」の薬効は、『庖厨備用倭名本草』に類似する。しかし、完全に正反対の内容も存在している。元禄版本の「土肉」の薬効は、部分的に『庖厨備用倭名本草』を参照している可能性がある。

むすび

『訓蒙図彙』初版本系統の❶初版本・❷頭書本・❸無刊記本にみられる「今云」という注記は、❹元禄版本・❺寛政版本では削除され、薬効を詳しく記載する本草書の性格をもつようになった。しかし、他方で、❶初版本で中村惕斎が意をはらった漢語・和語、下位分類など、本来の「語彙」に関する記載は、大幅に削除されることとなった。

❹元禄版本によって増補された薬効は、『本草綱目』「主治」、『庖厨備用倭名本草』と重なる。『本草綱目』に立項されない項目の薬効は、『庖厨備用倭名本草』と同じ内容がみられ、『庖厨備用倭名本草』は『本草綱目』を補うために用いられた形跡がある。ただし、『庖厨備用倭名本草』の内容が、元禄版本とは正反対の場合もある。

木村陽二郎氏[13]が指摘されたように、元禄版本は『本草綱目』だけでなく、『庖厨備用倭名本草』も「参考にした」とみるのは妥当な見解であるが、なお詳細な調査をしてその具体相を解明してゆきたい。

注

(1) 木村陽二郎「中村惕斎の『訓蒙図彙』について」117-123 頁（『教養学科紀要』5、一九七三年三月、東京大学教養学部教養学科）。

(2) 小林祥次郎「『訓蒙図彙』解説と索引」969-975 頁（『江戸のイラスト辞典　訓蒙図彙』、二〇一二年十月、勉誠出版）。

(3) 石上阿希「江戸のことば絵事典『訓蒙図彙』の世界」313-330 頁（二〇二一年三月、角川書店）。

(4) 楊世瑾「『訓蒙図彙』寛文六年初版本から元禄版本へ―大衆化の位相をめぐって―」（『文化・情報の結節点としての図像―絵と言葉でひろがる近世・近代の文化圏―』26 頁、二〇二一年三月、晃洋書房）。

（5）注（3）の前掲書 321 － 323 頁。
（6）木村陽二郎「中村惕斎の訓蒙図彙について」113 頁（『教養学科紀要』5、一九七三年三月、東京大学教養学部教養学科）
（7）白井光太郎『本草学論攷』第一冊 393 頁（一九三三年七月、春陽堂）。
（8）渡辺幸三「李時珍の本草綱目とその版本」54 － 61 頁（『東洋史研究』4、一九五三年六月、東洋史研究会）
（9）岡西為人『本草概説』229 － 230 頁（一九七七年十二月、創元社）。
（10）郭崇「『大和本草』「穀」類に内在する下位分類―『本草綱目』との比較から―」173 頁（『水門―言葉と歴史―』28、二〇一八年四月、勉誠出版）。
（11）楊世瑾「『訓蒙図彙』寛文版本と『本草綱目』承応･万治系統版本―図像の分析から―」278 頁（『語学教育研究論叢』36、二〇一九年三月、大東文化大学語学教育研究所）。
（12）杉本つとむ『日本本草学の世界』27 頁（二〇一一年九月、八坂書房）。
（13）注（6）の前掲論文。

［附記］本稿を成すにあたって、藏中しのぶ先生、佐竹保子先生、相田満先生、三田明弘先生、杉山若菜先生、尹仙花先生、笹生美貴子先生、オレグ先生から貴重な御指導をたまわりました。ここに記して、深く御礼申し上げます。